

車王府本鼓詞『三國誌』の成立過程について

——『三國志演義』との関係を中心に——

後 藤 裕 也

はじめに

宋代には大衆芸能としての講談がすでに行われていたことが当時の都市繁盛録からわかる。とりわけ三國ものを語る「説三分」は人気の演目であったと思われるが、現在ではもはやその内容を知ることが出来ない。元代に刊行された『三國志平話』は、そのような講談をもとに読み物へ改編されたものと考えられている。つまり、語り物は読み物の極めて重要な要素であったと言いうことが出来るであろう。

元末明初に至って羅貫中が著した小説『三國志演義』（以下『演義』）も、史実を中心に語り物や当時伝えられていた説話などを整理、編集したものである。明代、『演義』は人々の歓迎を大いに受け、数多くの版本が刊行されたが、その人気は清代、引いては現代まで衰えることなく読み継がれている。

では、小説の母胎となった三國語りはどうなったのであろうか。現存する資料としては、明成化年間に刊行された

「成化本説唱詞話」に収められる『花関索伝』があるが、これはいわば三国物語の外伝とでも言うべきものである。⁽¹⁾ また明末清初の弾詞『三国志玉璽伝』（原本は乾隆抄本）が近年発見され、『演義』との関係も指摘されてはいるが、総じてこの方面における資料不足は否めない。

ただ、清代も中後期に入ると、語り物そのものが大いに流行し、それを伝える貴重な資料として、いわゆる車王府曲本が発見された。⁽²⁾ その中には、三国の物語に取材した短編の語り物である子弟書作品が数多く収められるとともに、桃園結義から晋朝統一までを扱った鼓詞『三国志』も含まれている。

車王府本鼓詞『三国志』は、作者、書写者ともに不明で、作成年及び書写年も不詳である。郭精銳氏は車王府曲本所収の戯曲作品に見える語句から、それらが書写された時期は乾隆光緒間に限られるであろうとしている。⁽³⁾ 語り物の流行時期もこの間に重なることから、『三国志』の書写年代もそれを大きく隔たることはないであろう。その内容は概ね『演義』を踏襲しているが、随所に説話の挿入や省略がある。

では、この作品は具体的にどのような過程を経て成立したのであろうか。『演義』と三国の語り物作品との関係について、陳翔華氏は「小説『三国志演義』が完成すると、却って説唱文学作品の創作が大幅に推し進められることとなった。明清代から近代に至るまで、主に羅貫中の『三国志演義』に基づいて改編、或いは新しく創作された語り物作品は数え切れないほど多い。」と述べられている。⁽⁴⁾ 確かに『演義』の流行を考えると、もとはその素材であったはずの語り物作品も、小説の影響を免れることはなかったと考えられる。

そこで本論では、『演義』の幾つかの版本と比較しながら『三国志』の成立過程を考察し、語り物から読み物へと変貌した『演義』の影響が、翻ってその後の語り物作品にどのように及ぼされているのかということ明らかにして

いきたい。

『三國志演義』 版本の系統と鼓詞 『三國誌』

現存する『演義』の版本は三十種以上に及ぶが、これらに関する系統的かつ全面的な研究として、中川諭氏に『三國志演義』版本の研究』（汲古書院 一九九八）がある。氏によると、『演義』の版本は以下の三系統に大きく分けることが出来る。原作の文章が歴史書によって修訂され、嘉靖本を除いた諸本に詠史詩や史書にある故事（史書にはないが関索説話も含む）が挿入された二十四卷系諸本、歴史書による修訂が施されず、詠史詩が挿入され、葉逢春本を除いた諸本に花関索説話が挿入されている二十卷繁本系諸本、そして、やはり歴史書による修訂が施されず、本文が簡略化されていることと、関索説話が挿入されていることが特徴といえる二十卷簡本系諸本の三系統である。

本論で『三國誌』の成立過程を考察するにあたり用いた版本は、二十四卷系諸本から周曰校本・李卓吾本・毛宗崗本・李漁本の四種、二十卷繁本系諸本からは余象斗本（但し、欠巻は葉逢春本・志伝評林本を参照）、二十卷簡本系諸本からは劉龍田本・朱鼎臣本・楊美生本・六卷本の四種である。⁽⁵⁾

では、この『三國誌』は、どの系統の『演義』をもとに改編されたものなのであろうか。まず重要な手掛かりとなるのが、『演義』の系統分けでも利用された関索・花関索説話の有無である。関索説話とは、孔明が南蛮征討のため成都を出発すると、まもなく関羽の第三子を名乗る関索が突如現れて従軍するというものであり、一方の花関索説話は、荊州にいる関羽の下へ母を伴って花関索が訪ねてくる、というものである。そして『三國誌』について見てみると、花関索説話が挿入されるべき巻七十七にそのような話は見られないが、巻一百二十一には以下のような記述が見

える。

忽有關公第二子關索到行營來見孔明說，自荊州失陷，逃至鮑家莊養病，常想着要到川中見先帝與父報讐，皆因瘡痕未愈，不能行走。近日方才大愈，打聽得東吳的讐人盡皆誅戮，竟來西川見帝，恰好路遇征南之兵，因此特來叩見軍師。

引用は関索を「第二子」に作るが、その他多少の字句の異同を除けば、まさに『演義』に見える関索説話そのものであり、これを二十四卷系諸本の毛宗崗本及び二十卷簡本系諸本の劉龍田本について、該当箇所を挙げて比較してみる。

毛宗崗本

忽有關公第三子關索入軍來見孔明曰，自荊州失陷，逃難在鮑家莊養病，每要赴川見先帝報讐，瘡痕未合，不能起行。近已安痊，打探得東吳讐人已皆誅戮，逕來西川見帝，恰在途中遇見征南之兵，特來投見。

劉龍田本

却是雲長第三子關索也。來見孔明曰，自因荊州失陷，逃難在鮑家莊養病。每要來見先主報讐，瘡痕未合，不能起行。近日安痊，逕來見帝。今遇丞相南征，敬來投見。

傍点を付した句は二十四卷系諸本のみに見え、二十卷簡本系諸本には見られない。そして先に挙げた『三國誌』の引用部分にも、毛宗崗本の傍点箇所とほとんど同じ句があることを確認できる。

以上のことから、まず、花関索説話の挿入を大きな特徴とする二十卷繁本系諸本は『三國誌』の底本ではないということ、次に、同じ関索説話を取り入れているが、二十卷簡本系諸本よりは、二十四卷系諸本との関係がより緊密であるということが明らかである。

また、『演義』での関索の登場は唐突にすぎ、不自然な感が否めない。おそらく『三國誌』の作者も同様に考えたのであろう。卷一百十二には、関索の登場をより自然にするため、その伏線となる場面が挿入されているのでここで紹介しておく。

二爺關興多謀略，連忙分開兵一半，保護家眷頭里行，三爺關マツ貴マツ在後隊行。二爺關興親斷後…(略)…即時趕上三爺關マツ貴，將見戰之事說了一遍。三爺說，哥哥你往前去，保母妹奔川中而去，待小弟敵擋吳賊…(略)…潘璋心最狠毒，一鏢打中小爺臂後，二鏢又打在背上，三鏢又中脊背，把小爺打的痛入骨髓，提蘆鎗那里還拿得住，噹啷啷吊在地上，還虧小爺心中還懂人事，雙腿磕馬，往下大敗。…(略)…惟有暴剛與兩個叔伯兄弟三人不捨，兩個扶着關マツ貴，暴剛只趕着一個金銀駝子，皆行李衣服駝子盡行棄捨。三人逃出山路，回歸本家暴家莊，調養小爺之傷，三年才得痊愈。

(二男関興謀略に長け、急ぎ兵を二隊に分けます。家族を護るため先を行かせ、三男関索その後ろ。関興自らしんがり務め、…(略)…すぐに関索に追いつくと、敵に襲われたことをひととおり話しました。すると関索が言う

には、「兄者は先を急ぎなされ。母上らを護り西川へ逃げるのです。私めが呉の賊どもを食い止めましょう。」
（略）：潘璋は凶暴なことこの上なく、一枚の手裏剣は関索の腕の後ろに、二枚、三枚と背中命中。関索の痛みは甚だしく、どうして鎗を持ち得ましよう、ガラガラと地面に落としてしまいました。幸い意識ははっきりしており、両足で馬を蹴ってはひたすら敗走。…（略）：ただ鮑剛と二人の従兄弟だけは関索を見捨てず、二人の従兄弟が関索を抱きかかえ、鮑剛は金銀を載せた駄馬のみ連れて、荷物や衣服を載せた駄馬はみな捨てて行きました。三人は山道を抜け、一族の住む鮑家荘へと逃げ延びて、関索の傷の手当てをしましたが、三年の後によく傷が癒えたのです。）

場面は、荊州失陥の危機に際して、関興と関索が家族を引き連れ荊州を落ちていくところ、関興は兵を二手に分けると、関索に家族を護らせて先に行かせ、自らしんがりを務める。敵を振りきって関索に追いつくと、今度は関索が呉の追撃を食い止めて、その間に関興は家族を連れて蜀へ逃げていく。関索は呉の将潘璋によって深手を負われるが、鮑剛とその二人の従兄弟に助けられ、かろうじて逃げ延びる。そして鮑家荘へたどり着き、療養した関索は三年の後によく傷が癒えたというのである。

むろん『演義』にはこのような場面はなく、『三國誌』の作者が物語の展開をよりスムーズにするために挿入したものである。ただ『演義』における関索の登場場面のセリフに基づいた一段であることは明らかで、この一例も『演義』と『三國誌』の関係の深さをよく表している。

ここまでは『演義』と『三國誌』における関索・花関索説話を焦点として見てきたが、『三國誌』は関索・花関索

説話の有無、及び関索の登場場面における文章の異同という点から考えると、二十四卷系諸本をもとに改編された可能性が最も高いということになる。しかし、当然ながらこの一点のみで底本を定めるのは早計であり、次節以降で各版本との関係を具体的に述べていく。

毛宗崗本の影響

鼓詞が清代に流行したことを考慮すると、毛宗崗本の影響が最も大きいということは容易に推測できるであろう。そこで本節では、具体例を挙げながら毛宗崗本の影響が看取される箇所を確認していく。

まず、この『三國誌』において、場面を転換する際に頻見される表現がある。例えば卷十三、関羽が袁術軍によって包囲されたと聞き、劉備・公孫瓚・趙雲らに先立って、張飛がその報告に来た兵卒とともに、いち早く救出に向かい関羽の陣営に到着するという場面である。

玄德回言説正好，太守傳令快拔營。趙雲説，我與嚴剛爲前隊，大隊後邊行。言罷時，二人先奔了南陽路，再把張爺明一明。軍卒前引路，二人馬走似流星。此書速快不多敘，來至了老爺營前問衆人。

傍点を付した句がその表現であって、これにより張飛が関羽の陣営に向かう道中を省略し、次の句からは、すぐに関羽の陣営での場面が展開されている。さらには次のようなものもある。

劉爺答言說知道，何必大人語諄諄。儘管放心排人馬，等我回來論軍情。說把飛身上馬，揚鞭縱轡出了城。三國之書多剪斷，到了一座北平城。至府下馬早有人報，公孫瓚聞聽出府迎。

場面は卷二十一、曹操の徐州侵攻に対して陶謙は援軍を要請し、救援に駆けつけた劉備らは、まず孔融に会い、北平城にいる公孫瓚のところへ軍を借りに行くことを提案し、孔融がくれぐれも早く戻るようにと言って劉備を見送るところである。劉備が孔融のもとを発ち北平に至るところは、「三國之書多剪斷」という一句で省略され、続いて北平城での場面が展開される。

これらの表現は一種の常套句であり、特に注意を要すべきものではないが、次に挙げる一例は少し事情が異なる。場面は、南蛮平定に向かった孔明率いる蜀軍の將魏延が、孟獲の妻祝融夫人と相對するところ、卷一百二十四からの引用である。

不多一時，又是魏延前來要戰。祝氏當先。兩下里又哨會子介冑像貌，通名道姓，這纔動手。嘮叨了不成，第一才子之書摠要剪斷截說。祝氏當先與文長戰了數合，魏延詐敗而走。

周知のごとく、数ある『演義』の版本の中で「第一才子書」の語を冠するのは、毛宗崗本と李漁本の二種のみである。そして、これまでは例に挙げてきたように「此書」或いは「三國之書」という語であったのが、ここでは一見して明らかかなように、「第一才子之書」という語句が使われているのである。このことから『三國誌』は、二十四卷系

諸本に属し、「第一才子書」の語を冠する毛宗崗本、或いは李漁本をもとに改編された可能性が高いといえるであろう。

ただ、このような場面転換の常套句の中で、「第一才子書」という語句が使われているのはこの一箇所のみである。時期的には毛宗崗本が流行していたと考えられる状況においては、「第一才子書」という語そのものが『演義』の名詞として通用していたかもしれない。「第一才子書」といえば『演義』というつながりは、語り物の演者や聴衆にも容易に連想できたであろう。すなわち、この箇所だけが偶然右の引用のように語られたのかもしれないのである。そうすると、ただ一箇所のみの用例では、毛宗崗本或いは李漁本が底本であると確定するのは難しい。

しかし、この『三國誌』には、ほかにも毛宗崗本からの影響を示すと思われる箇所がある。例えば『三國誌』の巻一百十九、場面は関羽が呉に討たれた後、劉備がその弔いのため大軍を興して呉に戦争を仕掛けるが、陸遜の火計によって長く延びた自陣を焼き尽くされたというところである。

但見蜀兵死屍重疊，塞江而下。先主^{マツ}京失無措。這回書名曰陸遜營燒七百里。

引用にある「這回書名曰」は明らかに『演義』の題題を示している。そして毛宗崗本で該当する第八十四回の題題を見てみると、「陸遜營燒七百里、孔明巧布八陣圖」となっており、全く一致するのである。では、同じく「第一才子書」を冠する李漁本の題題はどうであろうか。やはり第八十四回であるが、「先主夜走白帝城八陣圖石伏陸遜」となっており、『三國誌』とは異なっている。また、その他の諸版本はいずれも李漁本と同じ題題で、唯一毛宗崗本のみ

が一致しているのである。

先に「第一才子之書」とあることから、毛宗崗本か或いは李漁本が『三國誌』の底本である可能性が高いと指摘したが、この『演義』の則題によって、李漁本もその候補からはずされ、『三國誌』の底本は毛宗崗本であったと確認できるのである。

毛宗崗本の大きな特徴といえば、当然その評語が挙げられる。そして、この『三國誌』にも、その評語を取り込んだと思われる箇所がある。まずは毛宗崗本の第八十四回、呉の陸遜が劉備率いる蜀軍を破り、さらに追撃しようというところ、陸遜は孔明が事前に魚腹浦に仕掛けておいた石陣に迷い込み、孔明の岳父である黄承彦の導きで何とか脱出することが出来たという場面である。

老夫平生好善，不忍將軍陷沒於此，故特自生門引出也。孔明知陸遜不該死的，却留個人情與丈人做。遜曰，公會學此陣法否。黃承彦曰，變化無窮，不能學也。遜慌忙下馬，拜謝而回。

（「わしは日頃より積善を心がけておるゆえ、將軍殿がここに迷い込んだのを見ていたたまれず、生門より連れ出した次第じゃ。」孔明は陸遜の命運がまだ尽きないことを知っており、陸遜に恩を売るため岳父に助け出させたのである。陸遜が「ご老人はこの陣立てを学ばれたのでございませうか。」と尋ねると、黄承彦は「その変化は無窮ゆえ、学び得られるものではござらぬ。」と答えた。陸遜はあわてて馬を下り、厚く礼を述べて帰っていった。）

傍点箇所は毛宗崗本の評語で、孔明の岳父黄承彦が陸遜を助けたということについて、孔明は陸遜の命運がまだ尽きないことを知っていたので、陸遜に恩を売るために岳父に助け出させたのであると批評している。この批評が当を得ているかどうかは別にして、以下に『三國誌』卷一百十九の該当箇所を挙げる。

老夫素日最好善，不忍你今喪殘生。陸遜說長者可學擺陣式，老夫說變化多端學不能。陸遜聞言又拜謝，黃成彦下山而去影無蹤。皆因陸遜不該死，諸葛亮他叫岳父送人情。

毛宗崗本と比べると、陸遜と黄承彦の言動の描写に若干前後しているところもあるが、最後の二句は明らかに毛宗崗本の評語を取り入れたものである。

もう一つ例を挙げておく。毛宗崗本第八十五回、蜀では劉備が崩御し、劉禪が後を継いで即位したが、いまだ皇后を立てておらず、孔明と群臣が張飛の娘を皇后とするよう奏上したという場面である。

時後主未立皇后，孔明與群臣上言曰，故車騎將軍張飛之女甚賢，年十七歲，可納爲正宮皇后。後主即納之。若論桃園結義，則兩人當是兄妹。然異姓爲婚，原不礙也。非若吳孟子、晉狐姬之類。

(時に後主はまだ皇后がなかったので、孔明は群臣とともに奏上し、「もとの車騎將軍張飛の娘は非常に聡明で、年は十七歳でございます。どうか納めて皇后となさいますよう。」と言うと、後主は張飛の娘を皇后に迎えた。桃園結義の関係から言うと、二人は確かに兄妹にあたる。しかし、異姓の婚姻であるからもとより支障はない。

呉孟子や晋の狐姫の類とは異なるのである。）

つまり、張飛の娘を劉禪の皇后として立てたことについて評語を付し、この婚姻には何の問題もないということを示明しているのであるが、『三國誌』卷一百二十には以下のような記述がある。

馬謖説翼徳先皇爲兄弟，此事行之欠分明。兄妹之稱結秦晉，怕人談論言不公。孔明説姑舊尚且成婚配，孤姫孟子一般同。馬謖聞聽無言對，衆官齊説禮上通。

孔明が群臣と協議して張飛の娘を皇后に立てようというところで、馬謖が「張飛殿は先帝と兄弟の契りを結んでおられたゆえ、この婚姻はなりません。兄妹の間柄で結婚すれば、必ずや人の謗りを受けましょう。」と意見を挟む。それに対して孔明は、「いとこ同士の結婚もあり、孤姫や孟子の例もあるではないか。」と答えたというのである。『三國誌』は「狐」を「孤」に作り、「呉孟子」をただ「孟子」としているが、これは単なる誤りと、この部分が七言句を中心とした唱詞であるための省略と考えられるだろう。毛宗崗本では、劉禪と張飛の娘の婚姻は、同姓の婚姻を犯した狐姫と呉孟子とは事情が異なるので認められるとしており、『三國誌』では、狐姫や呉孟子の例もあるのだから、このたびの兄妹の婚姻には何の問題もないとしている。狐姫と呉孟子を引き合いに出す理由は相反するが、この場面で狐姫と呉孟子のことを挙げている版本は、調査し得たところでは他に見あたらず、ここもやはり毛宗崗本の評語が『三國誌』に取り込まれたものと考えるべきであろう。

ここまでは、「第一才子之書」の語、毛宗崗本の則題、そして毛宗崗本の評語と、その影響が看取される特定の語句について見てきた。以上の例からも、『三國誌』の底本が毛宗崗本であったということは十分うかがえるのだが、次にその散文部分と毛宗崗本の本文の関係について見ていきたい。

鼓詞は七言句を中心とした「唱」の部分と、散文の「説」の部分を繰り返すことによって物語を進めていくので、毛宗崗本を底本として書き換えたのであれば、当然「唱」よりも「説」の部分と比較していくのが近道であろう。紙幅の都合上、以下に二例のみ挙げる。まず、荊州を手に入れた劉備が、張魯軍侵攻を恐れる劉璋のために、援軍を装って自軍を蜀に進め、さらに今後の策を龐統と協議するというところである。毛宗崗本は第六十二回、『三國誌』は卷九十三であるが、ここではさらに比較対象として、毛宗崗本と同じ二十四卷系諸本に属する李卓吾本の該当箇所も挙げておく。

毛宗崗本第六十二回

且説玄德在葭萌關日久，甚得民心。忽接得孔明文書，知孫夫人已回東吳。又聞曹操興兵犯濡須，乃與龐統議曰，曹操擊孫權，操勝必將取荊州，權勝亦必將取荊州矣。爲之奈何。龐統曰，主公勿憂。有孔明在彼，料想東吳不敢犯荊州。主公可馳書去劉璋處，只推，曹操攻擊孫權，權求救於荊州。吾與孫權唇齒之邦，不容不相援。張魯自守之賊，決不敢來犯界。吾今欲勒兵回荊州，與孫權會同破曹操，奈兵少糧缺。望推同宗之誼，速發精兵三、四萬，行糧十萬斛相助。請勿有誤。若得軍馬錢糧，却另作商議。

却說玄德在葭萌關住的日久，深得民心。忽然接着孔明的文書，知孫夫人回了東吳。又聞得曹操興兵攻打濡須，乃與龐統商議說，曹操擊孫權，自然有一家得勝，曹操得勝，順便要取荊州，孫權得勝，更要取我荊州。這事如何是好。龐統說，主公勿憂。有孔明在鎮守，料想東吳不敢輕犯荊州。就使來犯荊州，亦難討孔明的公道。主公可馳書送與劉璋，望他借兵借糧，只說，曹操攻擊孫權，孫權使人在荊州求救。一則東吳是唇齒之邦，二則孫劉係秦晉之好，必須前去救援才是。吾想張魯是個自守之賊，決不敢親來犯界。吾欲回到荊州，與孫權同破曹操。實乃兵少糧缺。望賢弟推同宗之誼，速發精兵三、四萬，行糧十萬斛。幸勿有誤。如或得了軍馬錢糧，咱却另作商議。

李卓吾本第六十二回

却說玄德在葭萌關日久，民心甚順。知曹操興兵犯濡須，與龐統議曰，曹操擊孫權，操勝則就取荊州，權勝亦取荊州矣。當如何。龐統曰，主公勿憂。有軍師諸葛亮，足智多謀，料想東吳不敢犯荊州。主公可移書去劉璋處，只推，曹操攻擊孫權，權求救於荊州。吾與孫權唇齒之邦，唇亡則齒寒矣。張魯自守之賊，決不敢犯界。吾今勒兵回荊州，共孫權約會同破曹操，奈何兵少糧缺。望以同宗之故，速發精兵三、四萬，行糧十萬斛，段疋軍器。星夜發付前來。請勿有誤。若得軍馬錢糧，却另作商議。

まず毛宗崗本と李卓吾本について見てみると、毛宗崗本は、李卓吾本の中のある版本を修訂して独自の批評を加えたものであるため、⁽⁸⁾ 全体的に同じような文章であるが、毛宗崗本の傍点箇所「忽接得孔明文書，知孫夫人已回東吳。」

の一文は李卓吾本には見られず、逆に李卓吾本の傍点を付した「足智多謀」「唇亡則齒寒矣」「段正軍器」「星夜發付前來」などの句は毛宗崗本にはない。次に『三國誌』の文章を見てみると、李卓吾本には見られなかった毛宗崗本の傍点箇所が、わずかな字の異同を除いてほとんどそのまま取り入れられている。また、李卓吾本にのみ見られた四句は『三國誌』にも見られない。李卓吾本と毛宗崗本は継承関係にあり、同系統に属する版本であるが、両者と『三國誌』の関係を比較してみると、『三國誌』の文章は毛宗崗本により近いことがわかる。

次に毛宗崗本及び李卓吾本の第一百三回、『三國誌』は卷一百三十六、五丈原で司馬懿と対峙していた孔明は、長らくの北伐によって心身をすり減らし、余命幾ばくもないことを天文によって知るが、姜維の勧めに従い、寿命を延ばすため星に禳いをかけ祈るという場面である。

毛宗崗本第一百三回

亮生于亂世，甘老林泉，承昭烈皇帝三顧之恩，托孤之重，不敢不竭犬馬之勞，誓討國賊。不意將星欲墜，陽壽將終。謹書尺素，上告穹蒼，伏望天慈，俯垂鑑聽，曲延臣算，使得上報君恩，下救民命，剋復舊物，永延漢祀。非敢妄祈，實由情切。

『三國誌』卷一百三十六

諸葛亮生于亂世，日老林泉，承昭烈皇帝三顧之恩，托孤之重，不敢不竭犬馬之勞，誓討國賊。不意將星欲墜，陽壽將終。謹書尺素，上告穹蒼，仰望天慈，昭監全垂鑑聽，曲延臣壽，使得上報君恩，下保民命，克復舊物，永延

漢祀。非敢妄祈，實由情切。

七八

李卓吾本第一百三回

亮生于亂世，隱於農迹，承先帝三顧之恩，託後主孤身之重，因此盡竭犬馬之勞，統領貔貅之衆，六出祁山，誓以討賊。不意將星欲墜，陽壽將終。謹以靜夜，昭告于皇天後土，北極元辰，伏望天慈，俯垂鑑察。

引用は孔明が星に捧げた祈りの言葉であるが、先の例と同様にまず毛宗崗本と李卓吾本を比較してみると、毛宗崗本の「甘老林泉」が李卓吾本では「隱於農迹」となっており、さらに李卓吾本の「統領貔貅之衆」と「六出祁山」の二句は毛宗崗本には見えず、特に後半は両者でかなりの異同があることがわかる。次に『三國誌』を見ると「日老林泉」となっているが、これは毛宗崗本の「甘老林泉」を写し間違えたものと思われるので、同じと考えてよいであろう。後半を見ても毛宗崗本とほぼ一致している。

ここまで毛宗崗本の影響が看取される箇所を示してきたが、以上の例から明らかのように、『三國誌』は毛宗崗本を底本として語り物に改編された作品であるといえよう。

しかし、ここで注意しなければならないことは、これまで毛宗崗本との共通点を示すために挙げてきた例を振り返ってみると、それらはすべて巻九十三以降のものであり、それ以前の例は見られないということである。つまり、『三國誌』は巻九十三以降については明らかに毛宗崗本を底本として改編されたものであるが、それが全編について言えるのかという点においては、いまだ疑問の生ずる余地を残しているのである。次節では、別の観点からそのこと

について考えていきたい。

挿入詩について

前節までにおいて、『三國誌』は数ある『演義』の版本のうち、毛宗崗本を底本として用いているということを例証し、しかしながら、卷九十二以前においてははまだ不確かであるということもあわせて指摘した。

とりわけ前節の最後に挙げた散文の近似性について言うならば、『三國誌』卷九十三以降の散文部分はほとんどが毛宗崗本によっており、とりわけ孔明の死後は、魏や呉のこのみを描写した段落は省略し、毛宗崗本の蜀に関する段落だけを抜き出して改編していると言うことさえ出来る。ただ、卷九十二以前の散文部分については挿入説話も多く、どの版本に最も近いかということは確認しがたい。

そこで本節では視点を換え、『三國誌』に挿入されている詩について、それらが『演義』の各版本に採録されている詩とどのような関係にあるのかを見ていきたい。

まずはじめに、『三國誌』には周静軒の詩が挿入されていることを確認しておく。場面は李傕と郭汜に捕らえられていた献帝が、二人の反間の隙をついて脱出し、董承・楊奉らに護られながら、命からがら廢墟と化した洛陽にたどり着いたというところ、卷二十八である。

静軒先生有詩嘆高祖英而獻帝時弱。詩曰

血流芒碭白蛇亡，赤織縱〔横游〕四方。秦鹿趕翻興社稷，楚睢推倒立封疆。子孫懦弱英風起，氣數彫殘盜賊狂。

看到西京遭難處、鐵人無淚也恓惶。(一)内は毛宗崗本により補った)

周静軒の詩は『演義』の多くの版本に見られ、各版本の関係性を考える上でも手掛かりとなるものであるが、毛宗崗本においてはその名前がすべて削られ、「後人詩曰」などのように改められている。一方で、『三國誌』には静軒詩として六首が採録されており、最後に出てくるのは卷七十一である。これを前節までに示した状況と重ねて考えると、やはり鼓詞卷九十二以前の底本は毛宗崗本ではないと言えそうではある。しかし、そのうちの一首は、今回調査した版本のいずれもが静軒詩としては採録しておらず、『三國誌』のみが静軒詩としている。一首だけとはいえないような例があるということは、鼓詞の作者が静軒の名前を随意に使ったという可能性も否定できない。

そこで、『三國誌』に採録されているすべての詩について、『演義』の各版本における採録状況と比較してみた。それを一覧にしたのが次頁に付した表である。表中「○」は同一の詩（もしくは同一と判断できる詩）、「△」は句或いは複数ある詩の採録順が異なる詩、「×」は全く異なる詩、「―」は採録無しを示している。

この表を用いて最初に確認しておきたいのは、やはり毛宗崗本との関係である。表の26を見ると、この詩は毛宗崗本のみに見え、他の版本では採録されていない。毛宗崗本は、それ以前は『三國誌』の詩と約半数しか一致しておらず、それ以降の詩に目を向けると、31を除きすべて一致している。26以降のその他の版本の状況を見ると、かなりの相違があることから、『三國誌』における毛宗崗本の影響は明らかである。すなわち、前節に挙げた毛宗崗本と『三國誌』の関係を示す幾つかの例はすべて卷九十三以降のものであったが、採録されている詩に照らして見る時、それが決して偶然ではなかったということが明確になるのである。もちろんそれ以降でも31のような例があることから、

	卷-葉	体裁と数	毛宗崗	李漁本	周曰校	李卓吾	余象斗	劉龍田	朱鼎臣	楊美生	六卷本
1	19-7	五律	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	28-14	七律	○	-	○	○	○	○	○	○	○
3	31-11	七絶 3 七律	△	-	△	△	△	△	○	○	○
4	32-4	七絶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5	36-5	七絶	-	-	△	△	△	△	△	△	△
6	37-3	七絶	-	△	△	△	△	△	△	△	△
7	44-26	五律	○	×	×	×	×	×	×	×	×
8	52-2	七律	○	-	○	○	○	○	○	○	○
9	57-16	七絶	-	-	○	○	○	○	○	○	○
10	60-1	七律 2	×	×	○	○	○	○	○	○	○
11	61-13	七絶 2	△	△	○	○	○	○	○	○	○
12	62-16	七律	×	○	○	○	○	○	○	○	○
13	62-19	七絶	-	-	-	-	-	-	-	-	-
14	69-9	七絶	-	-	○	○	○	○	○	○	○
15	70-8	七絶	○	-	○	○	○	○	○	○	○
16	70-14	七絶	○	-	×	×	×	×	×	×	×
17	71-11	七絶	△	-	×	×	○	○	○	○	○
18	75-5	七律	-	-	-	-	-	-	-	-	-
19	82-19	七律	-	-	-	-	-	-	-	-	-
20	84-10	七律 2	-	○	○	○	○	○	○	○	○
21	85-2	七絶	○	-	○	○	○	-	-	○	○
22	86-3	五律 2	△	△	○	○	○	○	○	○	○
23	86-7	七律	×	-	○	○	○	-	-	○	○
24	89-15	七絶	-	×	○	○	○	-	-	○	○
25	89-22	七絶	-	-	-	-	-	○	○	○	○
26	92-19	七絶	○	×	×	×	×	×	×	×	×
27	93-3	七絶 2	○	△	△	△	△	△	△	×	×
28	93-14	七絶	○	-	○	○	○	○	○	○	○
29	94-21	五絶七絶	○	△	○	○	○	○	○	○	○
30	95-18	七絶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
31	118-16	七絶	-	-	○	○	○	-	-	○	○
32	119-1	七絶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
33	122-19	七絶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
34	123-18	七絶	○	△	△	△	△	△	△	△	△
35	123-18	七絶	○	-	○	○	○	○	○	○	○
36	130-1	七絶	○	×	×	×	×	×	×	×	×
37	130-11	七絶	○	○	○	○	○	○	○	○	○
38	130-28	五律	○	-	×	×	×	×	×	×	×
39	132-19	七絶	○	×	×	×	×	×	×	×	×
40	134-24	七絶	○	×	△	△	△	×	×	×	×
41	135-19	七絶	○	×	×	×	×	×	×	×	×
42	136-16	七絶	○	×	△	△	△	△	△	△	△

毛宗崗本のみを手元に置いていたのではなく、適宜別の版本を参照しながらの改編作業であったと思われる。そして、その逆についても同じことが言える。つまり、毛宗崗本以外の版本をもとにしたと考えられる1から25の詩の中で、7・16は毛宗崗本のみに見える詩である。このことは、卷九十二以前において別の版本に基づきながらも、やはり適宜毛宗崗本より詩を採録したということを示しているであろう。

次に李漁本を見ると、相対的に『三國誌』との一致が明らかに少なく、底本であった可能性は極めて低いと言える。また、二十卷繁本系諸本に属する余象斗本は、挿入詩においては『三國誌』となかなか一致していると言えるが、先の関索・花関索説話の有無から、やはり底本として考えるのは難しい。『三國誌』は非常に多くの挿入説話を物語に取り入れており、それは日々聴衆を楽しませることが要求される作者及び演者の腐心の跡であろう。仮に花関索説話の挿入された版本が『三國誌』の底本として用いられたのなら、花関索説話は物語を興味深いものにするための恰好の素材であったはずであり、故意にこの話を削る方が不自然なことのように思われるのである。

周曰校本と李卓吾本は、ともに二十四卷系諸本に属する版本で、この表について見る限りでは全く同じ結果を示しており、かつ『三國誌』の詩とも相対的に一致していると言える。しかし、注意すべき点もある。3は七絶三首と七律一首が『三國誌』に採録されているが、周曰校本・李卓吾本ともその採録の順が『三國誌』とは異なる。一方で、二十卷簡本系諸本のうち、朱鼎臣本・楊美生本・六卷本は、『三國誌』と全く同じ順で詩を採録しているのが目を引く。次に17・25の詩に着目すると、周曰校本・李卓吾本の双方にない詩が、やはり簡本系諸本に見られるという例がある。唯一その逆の結果を示すのが40の詩であるが、これは物語も終盤の卷一百三十四にあることから、毛宗崗本に基づいたと考えるのが妥当であろう。以上のことから、周曰校本と李卓吾本よりも、簡本系諸本の方がより『三國誌』

に近いと考えられる。

その簡本系諸本四種について見ると、それぞれの採録状況はほぼ同じであるが、21・23・24の三首は劉龍田本・朱鼎臣本に見えず、楊美生本と六卷本には同じ詩が採録されている。この表における楊美生本と六卷本の結果は全く同じものであるが、中川氏によると両版本は近い関係にあり、氏はその書名から「英雄志伝グループ」(本稿では以下この両本を「英雄志伝本」とする)としてまとめられている⁽⁹⁾。そこで、改めて両本の結果を見ていくと、1から26までで採録していない詩は、いずれの版本にも見られないか、或いは毛宗崗本のみに見える詩であるということがわかる。

すなわち、『三國誌』における詩の採録状況は、卷九十二を境にして、それ以前は英雄志伝本二種と最も近い結果を示し、以降は毛宗崗本とほとんど合致しているのである。そして、卷九十二以前でも毛宗崗本のみに見える詩があり、それ以降でも唯一31のように、毛宗崗本に採録されていない詩が英雄志伝本には収められているということから、『三國誌』の作者は英雄志伝本と毛宗崗本の双方を用い、卷九十二までは前者を、以降は後者を中心にして語り物に改編したと考えられるのである。

さらに鼓詞が流行した時期を考えると、英雄志伝本の中でも、封面に「毛聲山先生原本」とある六卷本は、毛宗崗本の好評を受けて出版されたと考えられ、そのうえ複数の書肆によって後印⁽¹⁰⁾されていることから、おそらく当時は毛宗崗本と人気を二分していたのではないだろうか。同系統とはいえ時代的にも遡る楊美生本よりも、やはり六卷本の方が毛宗崗本と併用された可能性が高いと思われる。

では、その中心となる底本が変わったと考えられる巻九十二は、どのような場面で、そこに底本を変更した痕跡は認められるのだろうか。

まず巻九十一後半では、蜀の張松が自国を託すべき人物を求め、地図を携えて曹操のもとへと向かったが、その傲慢な態度に憤激し、地図を渡さず帰途につき、荊州に寄って劉備に会おうとする。その途上、龐統の弟龐系充なる人物と旅籠で一緒になり酒を酌み交わす。龐系充は張松のために占いをしてやり、近いうちに英明なる主君に出会うであろうと言う。また、張松が劉備のもとへ向かうと聞くと、兄が仕えているからと言って紹介状を用意してやる。張松は劉備がその英明なる主君に違いないと思いきが、実は龐系充は龐統自身であり、名前を騙って張松を劉備のもとへ向かわせようと画策したのである。

龐統は張松と別れると先回りして報告し、出迎えの準備を整えるというところから巻九十二が始まる。その後、劉備は張松を厚くもてなし、それに感激した張松は、龐統の弟から紹介状をもらったが、初対面ながらも古くからの友人のようにもてなしてもらえたので、紹介状を出す必要もなかったと告白し、蜀の地を取るよう劉備に勧め、地図を渡して帰っていく。蜀へ戻った張松は、劉璋に劉備を引き入れることを勧め、劉璋は黄權、王累らの反対を押し切り張松の勧めに従うこととする。以下はほとんど『演義』と同じで、「趙雲截江奪阿斗」の途中までで巻九十二は終わる。

もちろん龐系充の話は『演義』にはなく、おそらく『三國誌』の作者の創作と思われるが、物語の展開は極めて自然で、龐系充の話を挿入したとは感じさせないほど周到である。例えば、劉備らが張松を酒席でもてなしている時に『演義』では龐統のセリフがあるが、『三國誌』においては趙雲のセリフとなっており、龐統は面が割れているので

同席していないとの説明までである。龐系充の名前が最後に出てくるのは、劉備らが張松と別れる場面である。そして、蜀へ帰った張松は親友の法正と孟達に自分の考えを打ち明けたあと、劉璋に劉備を引き入れるよう献策するのであるが、おそらくそのあたりからはほとんど毛宗崗本に従っているものと思われる。また、卷九十二にある詩は毛宗崗本のみ同じであったが、これは張松の勧めに従った劉璋を必死で諫めた黄權と王累のことを詠んだ詩であり、龐系充の話よりはやや後ろにあるので、毛宗崗本を底本の中心に据えてからのものと考えられる。

したがって中心となる底本が変わったのは、龐系充の名前が最後に出たところから、張松が蜀へ帰って画策する間の場面と考えられるが、そこには底本変更の明らかな痕跡が認められるわけではなく、あくまで自然にこのあとも語り続けていく。

おわりに

以上、車王府本鼓詞『三國誌』の成立過程について、『三国志演義』との関係を中心にここまで論じてきたが、今一度簡単にまとめて小論の結びとする。

三国語りは古くから行われ、『演義』の母胎ともなったものであるが、『演義』が完成すると、却って語り物作品に小説の影響が見られるようになる。

『三國誌』もその一つであり、その成立過程を考えてみると、まず特定の語句や散文部分の近似という点で毛宗崗本からの影響が見られた。しかし、それは卷九十二以降にだけ見られるもので、それ以前の部分については確定できなかった。そこで、『三國誌』に挿入されている詩に着目してみると、単純に毛宗崗本だけを底本として改編したも

のではないことが明らかになった。今回の調査によると、『三國誌』の卷九十二以前は、数ある『演義』の版本の中でも、二十卷簡本系諸本に属し、書名に「英雄志伝」とある楊美生本と六卷本が最も『三國誌』と関係が深かったのである。そして時期的に考えても、毛宗崗本が世に出て後に刊行され、鼓詞の流行時期とも重なるであろう六卷本が底本として用いられたはずである。

つまり、この車王府蔵鼓詞『三國誌』は、卷九十二までは毛宗崗本を参照しながらも、六卷本をもとに語り物へと改編し、それ以降は毛宗崗本を底本として、一つの小説を語り物の作品へと改編したのである。

注

- (1) 『三國志玉璽伝』(董万周校点 中州古籍出版社 一九八六)の前言を参照。また『花關索傳の研究』(井上泰山ほか 汲古書院 一九八九)解説篇(五一頁)にも『演義』との関係について指摘がある。
- (2) 車王府曲本の内訳については、田仲一成「車王府曲本について」(『学燈』一九九一年六月号)、「再び車王府曲本について」(『学燈』一九九一年九月号)に詳しい。また専著としては劉烈茂・郭精銳等著『車王府曲本研究』(広東人民出版社 二〇〇〇)がある。
- (3) 郭精銳著『車王府曲本与京劇的形成』(汕頭大学出版社 一九九九)の「第二章車王府曲本 第五節劇作時間界限」の項を参照。
- (4) 陳翔華「明清以來的三國說唱文學——兼說它與歷史小説《三國志演義》的關係——」(中州古籍出版社『三國演義論文集』所収 一九八五)による。尚、原文は以下のとおり。「《三國志演義》這部小説產生以後，又反過來極大地推動了說唱文學的創作。自明清以至近代，主要依據羅貫中的演義來改編或重新創作的三國說唱文學作品浩如煙海。」
- また、三國ものの語り物作品を言語表現及び出版の面から考察したものに、上田望「人はなぜ三國志の物語を「唱う」のか——詩讀体講唱文芸に見える三國故事作品の生成と流通について——」(金沢大学文学部論集 言語・文学篇 第二十三号 二〇〇三)がある。

- (5) 今回使用したテキストは以下のとおり。『第一才子書』（錦章書局 一九三二）・『毛宗崗批評三国演義』（齊魯書社 一九九一）、『李笠翁批閱三国志』（『李漁全集』第十・十一卷 浙江古籍出版社 一九九〇）、『新刻校正古本大字音釈三国志通俗演義』（『明清善本小说叢刊』天一出版社 一九八五）、『李卓吾先生批評三国志』（ゆまに書房 一九八四）、『三国志通俗演義史伝』（関西大学出版部 一九九七・九八）、『新刻按鑑演義全像三国英雄志伝』（大谷大学蔵）、その他余象斗本・劉龍田本・朱鼎臣本・六卷本は『三国志演義古版叢刊五種』（中華全国図書館文献縮微複製中心 一九九四）を使用。
- (6) 『三国誌』は長編の鈔本で、複数の書写者の手になる。ゆえに音通や字形の近似による写し間違いが頻見され、字体も不統一である。本稿では、字体は原則としてすべて繁体字に改め、校正は施さずに必要な場合のみ注記するに留めた。
- (7) 狐姫及び呉孟子の同姓の婚姻については、『国語』に「同姓婚せざるは、殖らざるを悪むなり。狐氏は唐叔より出でて、狐姫は、伯行の子なり、実に重耳を生めり。」（巻第十）とあり、また『論語』に「陳の司敗問う。昭公は礼を知れるかと。孔子曰く、礼を知れりと。巫馬期を揖して之を進めて曰く、吾聞く、君子は党せずと。君子も亦党するか。君、呉に娶る。同姓なるが為に之を呉孟子と謂う。君にして礼を知らば、孰か礼を知らざらんと。」（述而 第七）とある。
- (8) 中川氏『『三国志演義』版本の研究』参照。
- (9) 中川氏前掲著書参照。氏は「英雄志伝グループ」としてほかに「魏某本」「劉栄吾本」「北京図本」「聚賢山房本」を挙げておられる。
- (10) 今回使用した六卷本三国志の封面には「寶華樓藏板」とあるが、版心には「二酉堂」や「文光堂」など、別の書肆の名前が散見される。また、東京大学東洋文化研究所は、「聚賢山房藏版」とある六卷本を所蔵するが、中川氏前掲著書によると、その版心にも「竹秀山房」「二酉堂」とあるとのことである。「寶華樓藏板」本は、印刷の状態から推すに、版木の損傷が著しく、かなり後に刷られたものと思われる。